政治革新で政策実現へ

参議院議員（全国区）　あくね　登

働く仲間と家族のみなさん、明けましておめでとうございます。

激動の八〇年代を迎え、勤労国民のための本当の政治が実現するため、皆様とともに頑張りたいと決意致しております。

昨年の総選挙の結果を私どもは肝に銘じ、金権腐敗の自民党政治に「ノー」という答えを出した皆さんの声を、率直に政治に反映するのが私の任務であります。

迫りくるエネルギー危機、インフレ、物価高、雇用、健保、年金、労働災害、住民福祉の後退等々、山積する課題を解決するために、政府に対し、強力に要求の実現をはかるとともに、みなさんにとってとくに、石炭産業制度政策要求闘争の強化が重要であります。

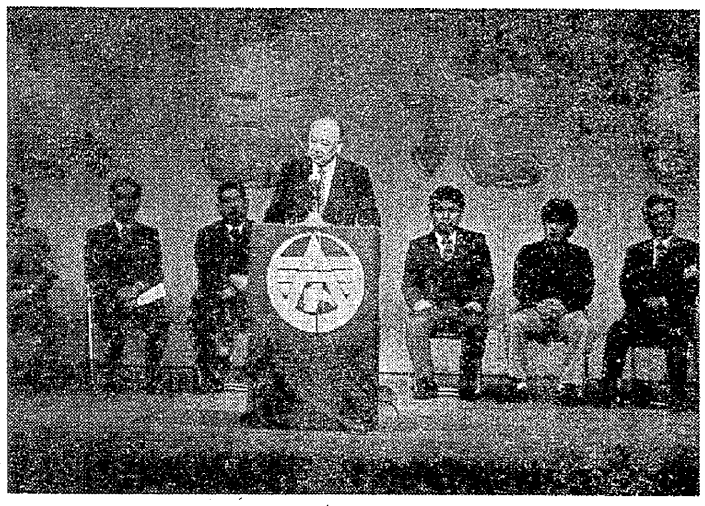
そのためには混迷する日本の政治を、国民の手にとりもどす政治革新が必要であり、本年の参議院議員選挙こそは、その一大転機と考えます。

石炭産業に働く仲間の生活と権利を守るため、私はこの闘いの勝利を目指し、全力をつくし頑張り抜きます。

仲間のみなさんの変らざるご指導・ご鞭撻と、より一層のご支持をお願いするとともに、皆様のご多幸を心からお祈り申し上げます。

×

筆者は、日本社会党中央副委員長の重責にもあります。



昨年の大災害抗議集会で、あくねさん。

ある仲間の死が教えるもの

唇に唄、心に太陽を

最後まで燃やし続けた〝三池魂〟

すでに九年も前に、定年のため三池炭鉱を退職した身にもかかわらず、最後の最後まで三池魂をうしなわず、闘いの火を燃やし尽しながら、ガンのために倒れていった人がある。その人の名は、後藤留治さんである。魂は今もきっと、三池の空で生き続けていることだろう。

写真は後藤さん

惜しまれる死

ことの次第は、三池主婦会創立二十五周年を記念する集会（十二月七日）に出席した永田弘さん（三池労組の元執行委員。熊本市新屋敷二丁目二八居住。九学通り薬局代表取締役）によってもたらされた。

後藤留治さんは、永田さんとも、三熊会（さんゆうかい。会員五十三人。山下茂会長）の会員として、退職後の会活動の先頭に立ってきた人だったが、不幸にしてガン（胃）という不治の病に冒され、去る十月五日入院先の国立病院で永眠した。六十四歳だったが、功績の多い人だっただけに、会の内外から惜しまれている。

燃える三池魂

三池炭鉱にあるとき後藤さんは口方採炭工として、四山鉱の採炭場で働いた。四山社宅では、熊社の二十三棟に居住していた。

昭和四十五年六月、定年のため四山鉱を退職。その後は、住居を熊本県菊池郡合志町富岡一二〇―一に移し、もっぱら金属塗装業で身をたててきたが、内面に燃える三池魂が誘ったか、同年に発足した前記の三熊会に加わり、情熱的に活動してきた。三池闘争の体験が、とかく安住することを求めがちな退職後の暮らしぶりを許さなかったのだ。

五十三年一月六日、胃ガン治療のため熊本の国立病院に入院。同月十三日手術。五月二十日退院したが、翌五十四年五月十日再び国立入院。なか一時退院したが、すぐ三たび同病院入院。八月六日再手術。そして十月五日死亡。

昨年の総選挙（十月七日投票）のときは、残念ながら、死期を目前にしていた。にもかかわらず、社会党候補の連呼が病室に流れてくるや否や、毎回必ず、はなせぬ酸素吸入器も取りはずしては「社会党がんばれ」、と叫んだ。

消え去った命

投票に先だつ四日前の三日のこと、後藤さんはがんばって不在者投票を行なった。医師や看護婦のどんな強い静止も耳に入れず、投票する意志を変えなかった。やむを得ず、医師と看護婦がつき添って、タンカで、骨と皮ばかりの体を仮投票所（二階）へ運んだが、すでに候補者名を記入する力さえなかった。か細い父親の声に耳をそばだてながら、娘さんが代筆をはたしたというが、後藤さんは命尽きる最後まで三池魂を燃やし尽したのである。

仮投票後二日、一般の投票日の七日に二日前の五日、後藤さんは永眠した。

×

なお、遺族には妻の貴和子さんがあるが、故人は常々次の言葉をよく口にしていたという。

「心に太陽を持って。嵐が吹こうと、吹雪が舞おうと、また天に黒雲、地に争いが絶えなかろうと、いつも心に太陽を忘れるな。苦しんでいる人や、悩んでいる人ははげましてやろう。勇気をうしなうな、唇に唄を、心に太陽をもてと」

後藤さんの魂は、きっと三池の空にとどまり、闘いを見続けてくれていることだろう。

俳句　新年

退職者　高椋　竜生

病む妻に笑ひ戻りし十二月

下手は下手なりの句を詠み去年（こぞ）今年

切り貼りの障子のなかのお元日

初日記夢ふくれくる余生かな

付け始めし折目正しき菊日誌

川柳　元旦

本所指導部　山下みのる

ガム程に伸びる田舎の餅をほめ

年賀状裾に幸福つけてくる

民宿の炭火へ餅の味が生き

ご無沙汰の東元旦へ音を立て

初詣してもつく運つかぬ運

なかま

三川指導部

坂本　博さん

▼…今回は、通称ヒロしゃんで、職場（三川鉱坑外の仕上げ）の仲間から親しまれている坂本博さんを紹介します。

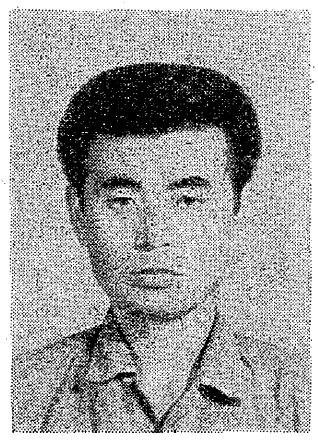
昭和三十八年十一月九日のあの炭じん大爆発で、父親の与七郎さん（当時五十一歳）を殺され、三十九年三月二日、入れ替え採用として入社。

五人きょうだいのなかで、次兄として生まれたヒロしゃん。愛妻の弘子さんとの二人暮らし。来年の三月には、待ちに待ったベビーちゃんが生まれるのだそうです。早く春がこないかなア、と待ち遠うしい顔。

▼…ヒロしゃんは、職場では分会長。また地域でも役員と、ここ十数年間職場・地域で頑張ってきました。とにかく、責任感の強いヒロしゃんです。「何でも、人まかせにはできない人間」、と人はいいます。

一日の仕事を終えて帰れば、夕ごはんのとき、とっても好きなビールを愛妻の弘子さんと晩酌するのがなくてはならぬこと。やがて生まれてくるベビーのことを思いながら、二人が仲むつまじく晩酌のビールを汲み交わす姿が目の前に浮びます。

（三川＝樺島敬三・記）



坂本さんは39歳。〇歳の愛妻弘子さんと、大牟田市小浜北社宅6棟（57―1621）に居住。

園芸

サークル活動のなかの

忘れ得ぬ思い出

三川指導部　田上　勇

私達が園芸のサークルをつくったのは、三池闘争後の昭和三十六年でした。

発足当時半数の人はたいして植木ももたず、ただ先輩の人達のものを見ては感心し、自分のものは指導者に依頼して手入れをやったものでしたが、そのうち、みんながさまざまなものを手がけるようになりました。

なかでも一番手っ取り早く、そして誰にも手軽にできるサツキを育て、そのうちその展示会をやろうということになりました。展示会場は、直射日光と雨露がしのげ、そして多くの人びとに見てもらえ、駅の美化に役立ち、場所代もいらないということで、大牟田駅のホームで、ときまりました。

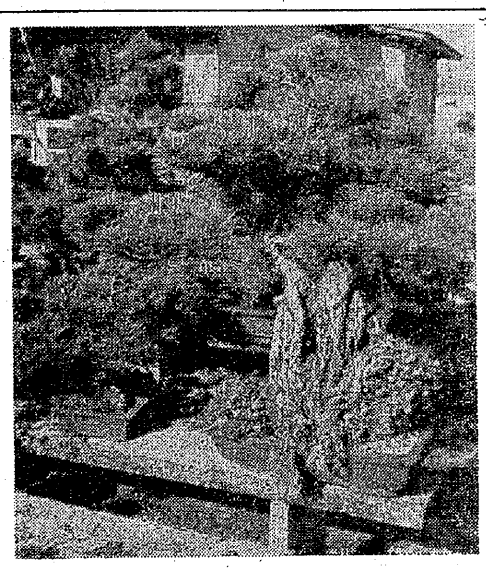
さっそく会長と二人で、駅長に交渉に行きました。

展示については話がきまりましたが、「三池労組宮浦園芸部」のサークルの名称と、それに「私達の組合は、世間でいわれるような、ガムシャラに闘うばかりの闘争主義ではなく、差別にたえながらの激しい坑内労働の余暇には、このような趣味も持ち合わせています。皆さんに喜んでいただければ幸いです」、といった趣旨のことを書くのはことわられました。私達はそれでも、展示さえできれば、ということでふみ切ったのでした。

せめてのこと、展示した植木鉢には「三池労組、誰れそれ」と書き、水かけも、「花の調子がおかしいそうですから……」などと口実をつくって、制限以上の人間が改札口をうまく通り抜けたり。

ホームで手入れするのをきっかけに、お客さんとの交流が始まって、すると駅長さんも思わずほめ言葉をかけては通りすぎていきます。会員の顔から「してやったり」、と笑みが浮んだものです。

ともあれ、サークル活動のなかで思い出されることは多いです。



すごい、松の盆栽の一つ。